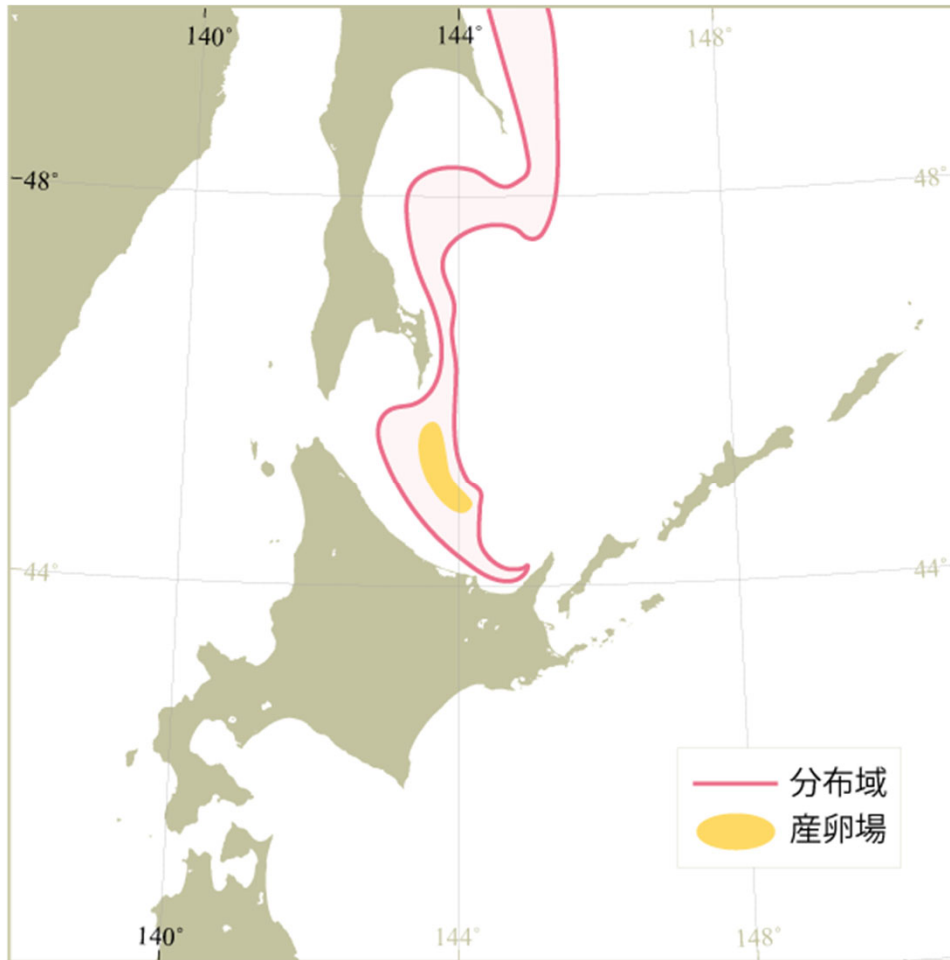




ズワイガニオホーツク海南部 令和7年度資源評価結果

生物学的特性等



- ロシアとの跨り資源
日本水域は分布の南端
- 北海道オホーツク海側～サハリン東岸の大陸棚および大陸斜面上に連続的に分布
- 日本水域とロシア水域の間で季節移動している可能性が高いが詳細は不明
- 北見大和堆北西部の水深150～200 mの海域で産卵、その他の産卵場については不明
- 産卵盛期は5～6月

資源評価の方法（昨年度）

2024年漁期（7月～翌年6月）の調査船調査データ



漁獲対象資源（甲幅90mm以上の雄）の
分布密度推定値（資源量指標値）



資源管理基本方針で定められた「**維持または回復させるべき目標**」となる資源量指標値「**5 kg/km²（平成15年（2003年）から令和元年（2019年）までの間に最低とされた値）**」を基準に現状評価*

* 本資源は跨がり資源であり、新漁業法に則したMSYに基づく管理基準値の設定は困難であるため

資源評価の方法（今年度）

2024年漁期（7月～翌年6月）の調査船調査データ



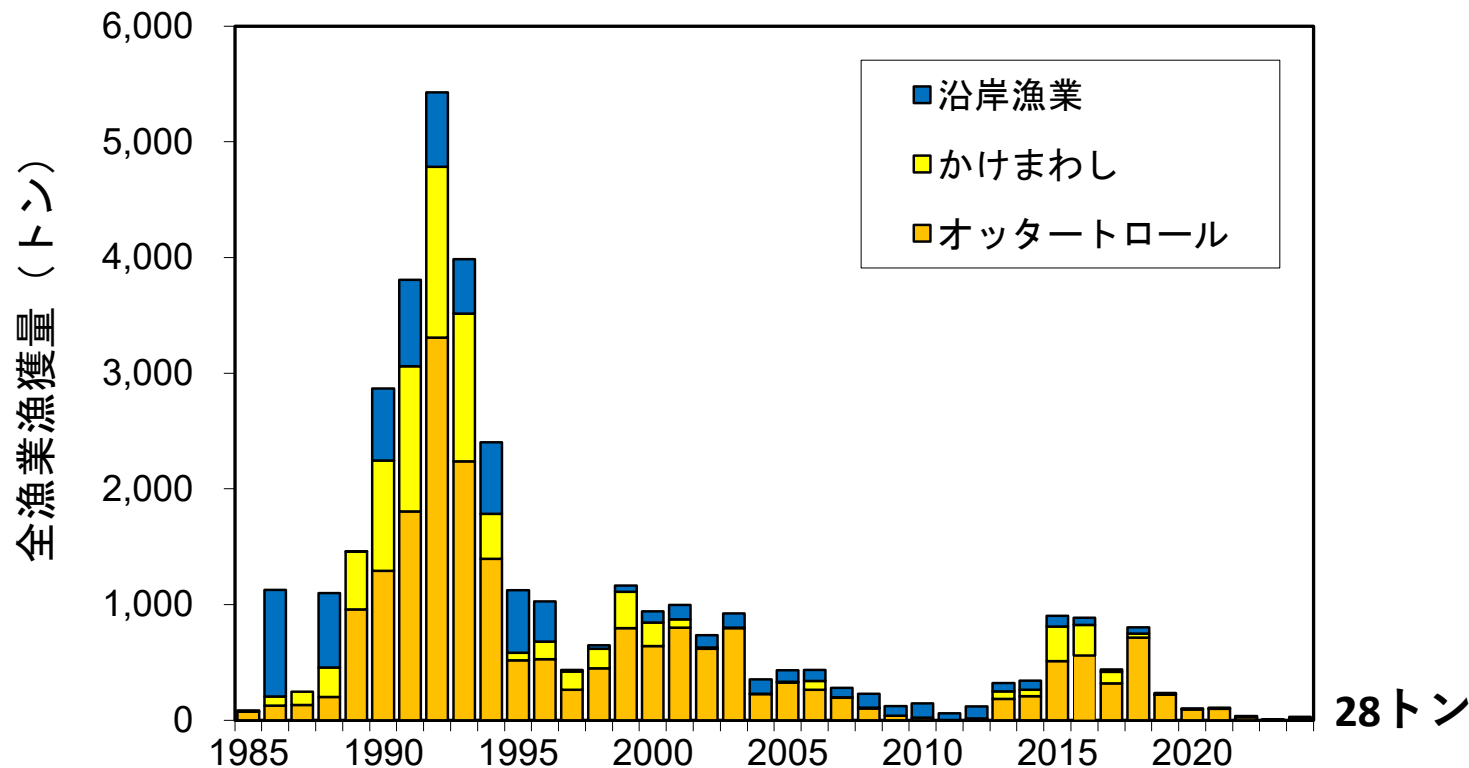
漁獲対象資源（甲幅90mm以上の雄）の
分布密度推定値



資源管理基本方針で定められる「維持または回復させるべき目標」の検討のため提案した、資源量指標値の平均値（103 kg/km²）および2022年漁期を除く過去最低値（5 kg/km²）を基準に現状評価*

* 本資源は跨がり資源であり、新漁業法に則したMSYに基づく管理基準値の設定は困難であるため

漁獲量の推移



- 1990年代前半に5000トンを超えるピークがみられたが、その後減少して推移、2024年漁期は28トン（沖底：17トン、沿岸漁業：11トン）
- 資源が多いスケトウダラやマダラの操業状況がズワイガニの漁獲の多寡に影響している
- 外国船が違法に設置したかにかご等が2000年代～2010年代前半と2010年代末以降における沖底の漁獲量減少の一因と考えられている

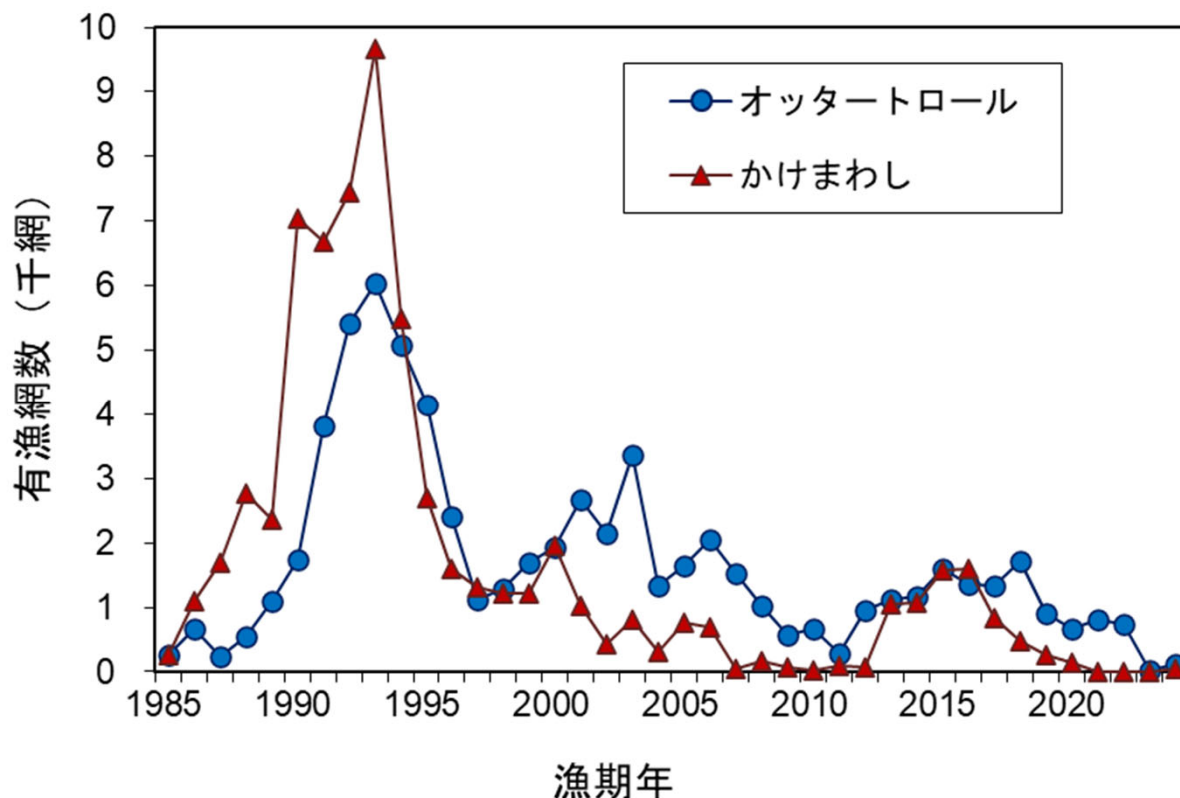
前回のSH会合における指摘事項とりまとめ

- 外国漁船による漁獲（補足：我が国EEZ内のFOC船等による違法操業）が漁獲量に与えた影響について、令和7年度資源評価結果への記載を検討する。

→ 資源評価報告書に以下の説明を追記いたしました。

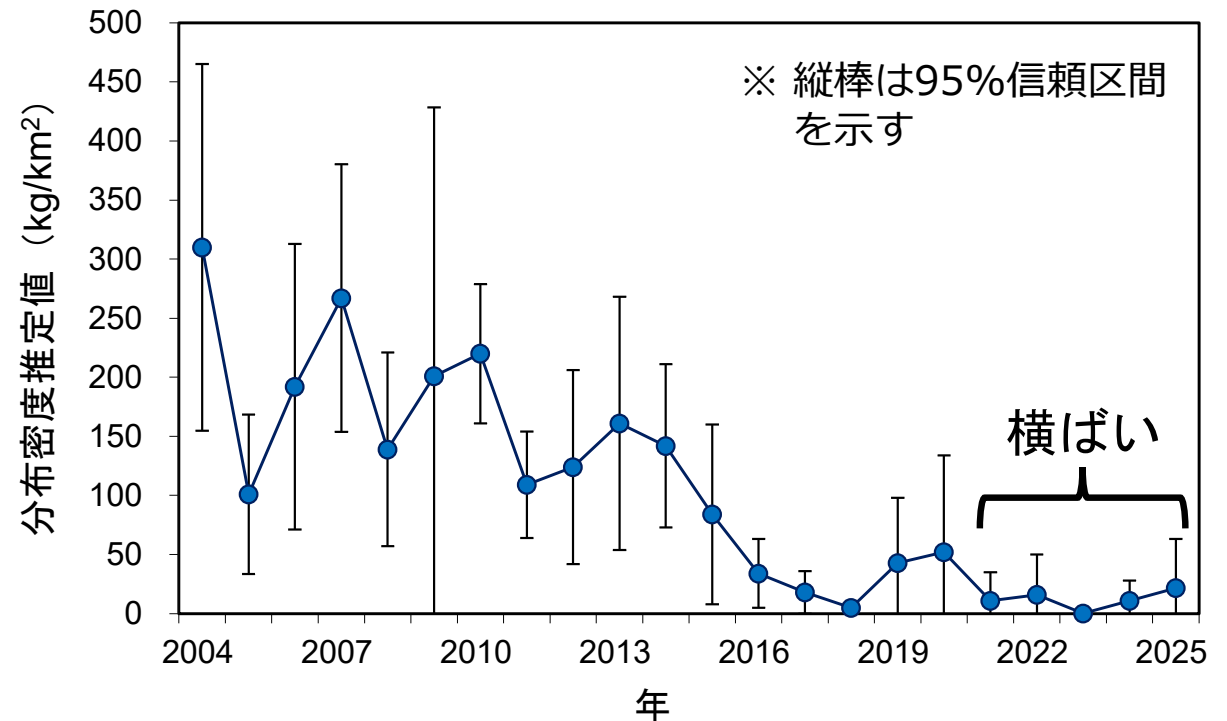
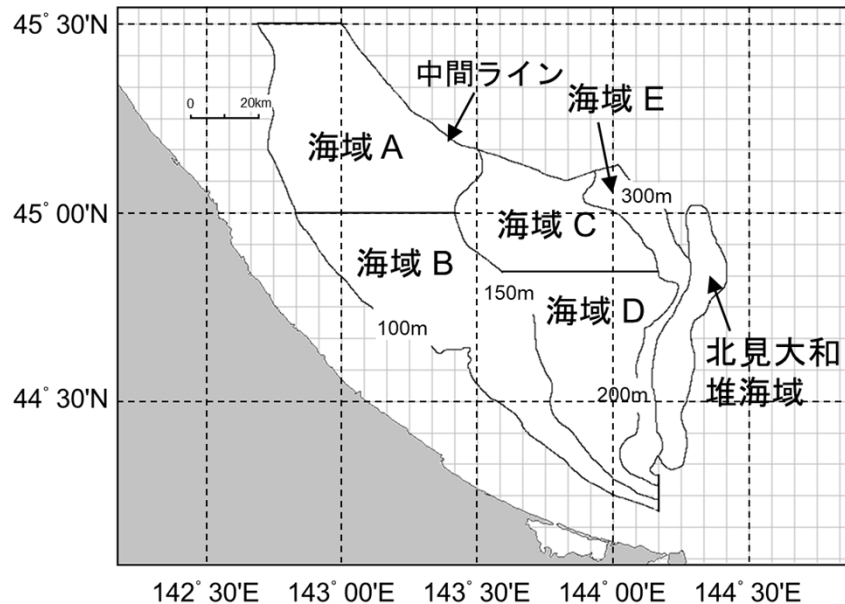
ズワイガニを含むカニ類は商品価値が高いためにオホーツク海などにおいてIUU漁業の対象となっている。本資源の漁場においても、外国船によって違法に設置されたかにかご等によって沖底の操業に支障が生じており、このことが2000年代～2010年代前半の漁獲量減少の原因の1つと考えられる。2014年12月に「北西太平洋における生物資源の保存、合理的利用及び管理並びに不正な取引の防止のための日本国政府とロシア連邦政府との間の協定」が発効したのち、2015～2018年漁期に漁獲量が増加したのは、水産庁による漁業取締りや違法漁具の押収等で本資源の漁場が広く使えるようになって、沖底によるズワイガニ狙いの操業が増えたことが一因と考えられる。ただし、その後も本資源の漁場においては外国人が違法に設置したとみられるかにかご漁具がみられており（水産庁 北海道漁業調整事務所 2025）、漁獲量は減少傾向にある。

努力量の推移（沖底の有漁網数）



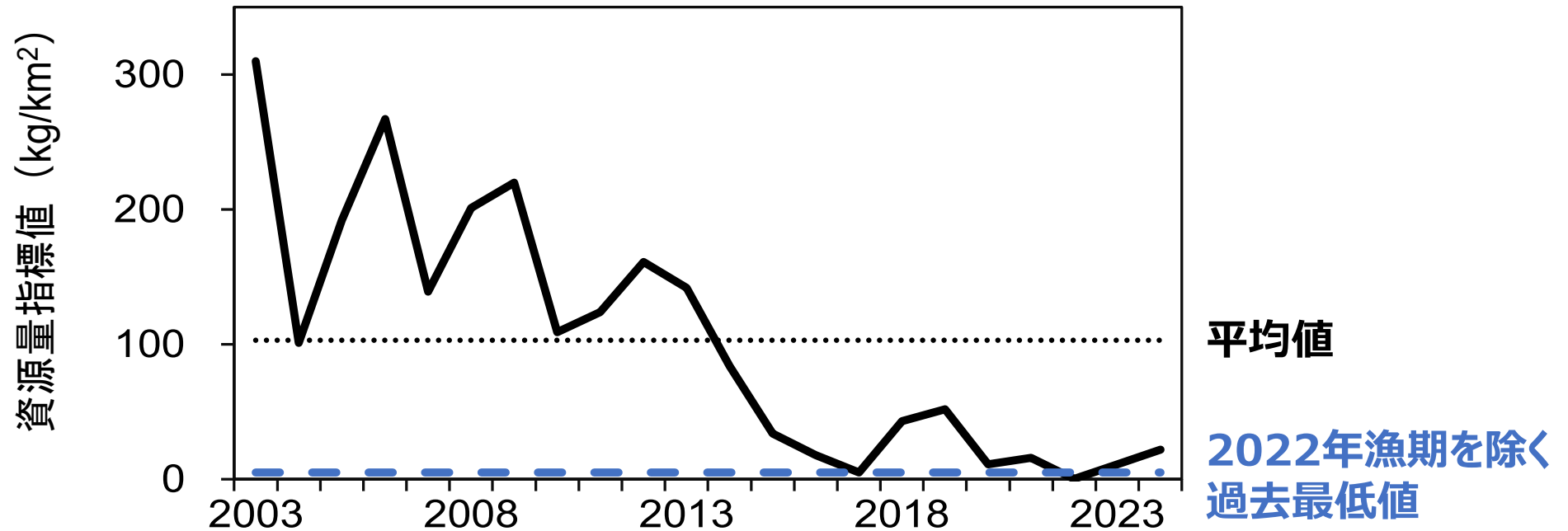
- 漁獲努力量は、1994年以降オッタートロール、かけまわし共に増減しながら2011年漁期まで減少
- その後も増加、減少して、2024年漁期にはオッタートロールで108網、かけまわしで40網となった

資源量指標値の推移



- 資源量指標値（調査船調査による漁獲対象資源の分布密度推定値）は、2004年の310 kg/km²から減少して2015年には100 kg/km²を下回り、2018年には5 kg/km²となった。その後増加するも再び減少、2023年に0.2 kg/km²、2025年は22 kg/km²であった
- 直近5年間の動向は「横ばい」

管理基準値の更新について



- 資源量指標値が来遊量を反映した指標であると考え、2003～2024年漁期の平均値（103 kg/km²）および2022年漁期を除く過去最低値（5 kg/km²）を「維持または回復させるべき目標」の検討のため提案
- 2022年漁期の資源量指標値は過去最低値を更新したが、調査船調査の結果、分布様式や甲幅組成が例年と大きく異なっており、その資源状態は評価の基準として適切ではないと考えられた
- 2024年漁期の資源量指標値は 22 kg/km²であり、2003～2024年漁期の平均値を下回るが2022年漁期を除く過去最低値を上回る

評価と提案のまとめ

- 本資源は日本水域とロシア水域に跨って分布し、日本水域における情報のみでは「跨り資源」である本資源全体の動向を捉えることができないことから「漁獲管理規則およびABC算定のための基本指針」に従い計算される管理基準値案に基づく漁獲管理規則の提案は困難である。
- 資源管理方針に関する検討のため、資源量指標値（調査船調査による漁獲対象資源（甲幅90 mm以上の雄）の分布密度推定値）の2003～2024年漁期の平均値（103 kg/km²）および2022年漁期を除く最低値（5 kg/km²）「維持または回復させるべき目標」として提案する。
- 2024年漁期は 22 kg/km²であり、平均値を下回るが2022年漁期を除く過去最低値を上回った。



ズワイガニ（オホーツク海南部）①

ズワイガニは我が国周辺では日本海、オホーツク海、および茨城県以北の太平洋沿岸に分布し、本評価群はこのうちオホーツク海南部に分布する群である。本資源の漁獲量等は漁期年（7月～翌年6月）の数値を示す。

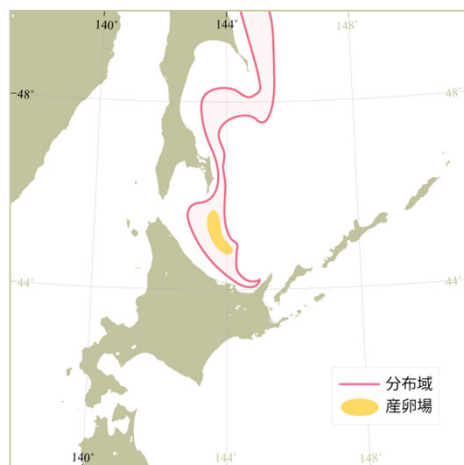


図1 分布域

本資源は日本水域からロシア水域にかけて連続的に分布する「跨り資源」である。

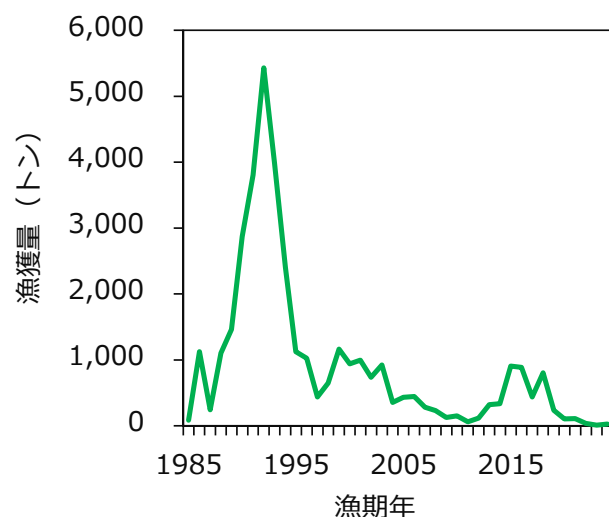


図2 漁獲量の推移

本資源の我が国による漁獲量は、2000年漁期以降減少を続け、2011年漁期には60トンとなったが、その後増加した後、2024年漁期は28トン（沖底オッター：16.6トン、沖底かけまわし：0.8トン、沿岸漁業：10.9トン）となった。

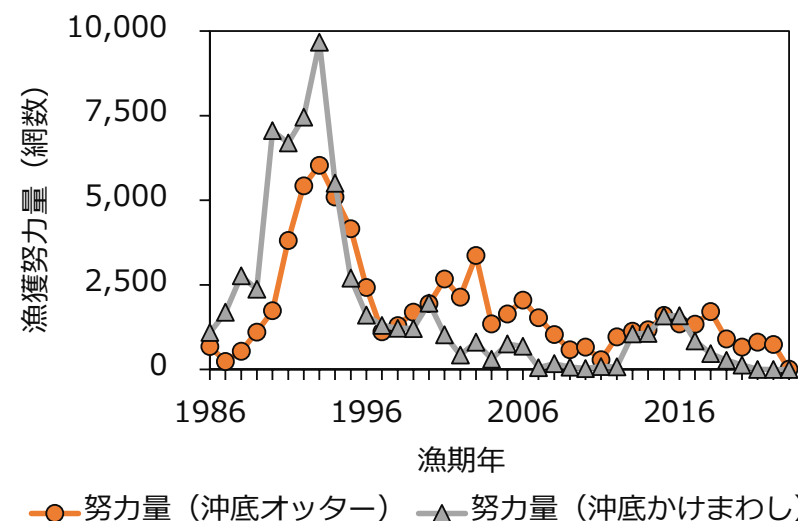


図3 漁獲努力量の推移

漁獲努力量は、沖底オッター、沖底かけまわし共に増減しながら2011年漁期まで減少を続けたが、その後は増減しつつ、2023年漁期には沖底オッターで12網、沖底かけまわしで0網となった。2015～2018年漁期はズワイガニ狙いの操業が増えたこと等により、漁獲量が多かったと考えられる。

ズワイガニ（オホーツク海南部）②

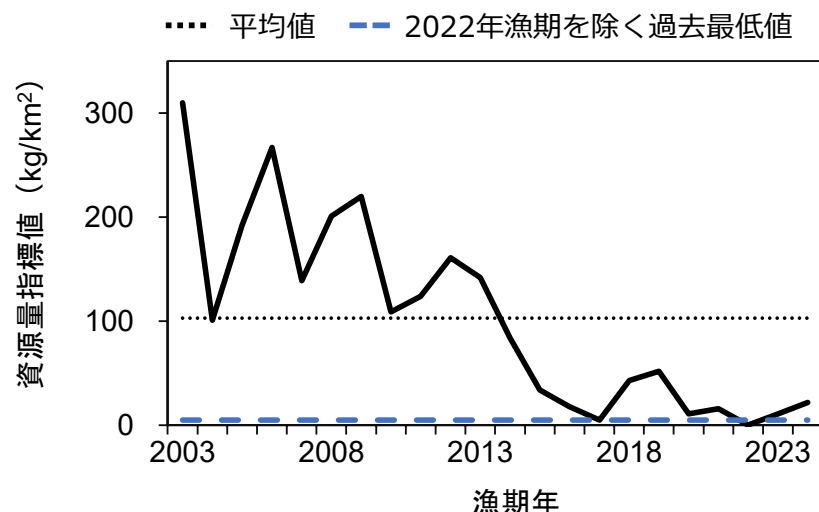


図4 資源量指標値とその平均値と過去最低値

調査船調査による漁獲対象資源（甲幅90mm以上の雄）の分布密度推定値を資源量指標値とした。資源量指標値は、2017年漁期に5kg/km²まで減少した後、一旦増加したものの、2020年漁期以降は再び減少し、2024年漁期には22kg/km²となった。

資源管理方針に関する検討のため、資源量指標値の2003～2024年漁期の平均値（103kg/km²）および最低値（5kg/km²；ただし2022年漁期を除く*）を評価の基準にすることを提案する。2024年漁期の資源量指標値（22kg/km²）は、平均値を下回るものの最低値を上回る。

本資源の管理基準値等の検討について

本資源は日本水域とロシア水域に跨って分布し、日本水域における情報のみでは「跨り資源」である本資源全体の動向を捉えることができないことから「漁獲管理規則およびABC算定のための基本指針」に従い計算される管理基準値案に基づく漁獲管理規則の提案は困難である。

現行の漁獲シナリオでは、我が国の漁船による漁獲の状況等を踏まえて、我が国漁船の操業水域に分布する資源の最適利用が図られるよう漁獲を管理するとされている。

*2022年漁期は分布様式や甲幅組成が例年と大きく異なっており、その資源状態は本資源の評価の基準として適切ではないと考えられるため